



門 13
號 3544
卷

湯

色 說 序

色 說 序

竟

之 穴 子 住 で 々 古 説 の

店 張 加 里 糶 七 後 三 出 々

ハ 目 高 と 鼻 と 耳 と 舌 等 然

此 書 也 び っ っ っ 入 口 の 物

人 せ ぞ ぐ 顯 七 々 小 七 七

色 道 玄 七 力 五 極 七 七

早稲田 大學 圖書
31.10.25
藏 書

既^て了^り紙^を屑^く筆^を小^に殺^すて
を^は嵐^の志^と祿^りる^らんと
せ^しと^の例^の道^人傳^とあ^らず
そ^の文^と編^むを^は漸^く二^三
が^六章^に就^き得^らる^に至^る哉
畫^をあ^らる^る葭^が貴^がこ^の
切^り賣^{して}寂^光淨^土の
揚^屋瓦^を見^ると^は釣^り懸^り
る^る奴^子と^は相^とり^て真^實
自^然の^情を^は悟^る文^は過
番^のい^やき^り出^く理^の
火^乃見^櫓の^高き^りた^か
し^の岸^端の^いぬ^せに
座^て二^階に^は補^のき^き

通ど何ま一流正境
 人るり是の高愕乃鼻
 け地藏乃化身にる
 うとぐひるまん拈金盛
 夫夫志徳ふして靡中
 の本さるるれど表霄一
 刻まふのそ難波の半
 のうさし悪補も吸蔓
 花のうろ名よまごみなる
 べし執いほえての蜻
 足紙とほめて蛇となき
 糞が殺心して山乃芋
 とるるりもあびさるる
 金の肌とらみある

身ハ中流ちゅうりゅうの船ふねと等ひとし
常つねリ帆かありとかけつな
い一つ客きやく乃機嫌きげん法ほうより
梶かぢ面めん梶かぢかせどもく或あるを地
を乃風かぜよおろされまこと
密ひそ支しの波なみよよづんで彼かの
岸きしよ漕こ舟ふねの漣うづ原はら
あひよ等ひとししるへ！ 詔せみ
實まことし老お君子くんしの肺はい行ゆ
いよは口くち乃君きみも流ながるは
今いまんで真まこと實まこと不二ふじの妙たぎ知ち
し玉たまをよと婕せう婦ふを口くち
ほぐこ式しき詔せみをゆいとする
えらむ才さいアルゆいせん

り此裡と後、のい何
章乃、る流、せ、知ん
て、考へ醒てお、い、く
此書と熟讀して大
了、い、ん、人、冬、山、道、の
聖域よ、い、ろ、べ、い、鳴、呼、り
の、願、文、見、ま、い、い、き、い

寛延卯の月

風鈴主人漫書

跡の人傳序

水の清せい潔けつ妙まうの塞ふさでる

秋あきのとき多おほ子こ子こをを生な

一い五ご穀こく乃の生せいををううる

鐘かねてて食たをを時とき多おほ脾ひ胃い

張ちやう撫ぶびび長ながてて手てああんんだだ

ととうう一いるるいいるる答こたととままりりのの不ふ

わたりゆく 又ふ 無射
らずや 傾 年 流 とう
る 山 猫 と 生 地
味 と 損 して 脚 赤 組 と
なる 凡 物 と 長 ず 必
字 圖 一 一 一 一 の
し ち ち ち 今 の ち ち ち

數 十 八 僧 形 の
者 あり 賣 物 の 地 女 あり
以 して べ 下 流 一 所 三
上 上 五 五 徒 ち ち ち
友 匠 師 子 也 為 人 瓢 杯
う へ 普 一 道 一 五
カ ち ち ち 揚 屋 の 雪 山 山

く下へ船の窓より
ふく排は懐く多るふ
耳ぞと幸り知らせきぬ
づ六季を一語せしり
忽訪の雲尔来ど大
晦日よ金を拾い如く
片月をこゝの鼻を寂ら
く地て一息豁然し
る道のき店をくらわ
くら終り路婦を推し
貴んで風情をいほの
下りあぐさ一足が為
し傳をりこく果あり
りり見せしむる見

心距
象穉

四十振袖好
相見惹客類



交情總若醴

希笑獨醒人

美奈子題

交造物者の功用ありや。子能万象小して。
其變化し又きこまりまし。南枝小枝乃
梅の雨落。改よこやねらと見らまし。非情
もくねらくのごとし。況んや人倫よかこ
とや好悪負買ハ。則天の命むらまゝうせ。
人カ乃施以れよあん。下惠盗跡が足
才の如くあるとひくかんが見るべし是等

八がんどよ代の半よして。まゝも見ぬ所
 人の寝言をまき。悪かきまき。いつ乃
 以より走と欲この場町よ。仕切り場と
 勤り男ありり。坪四のそこをうとぬえ。
 仕凝傳変の。どうも動りぬ。男とこうりて。
 小見せ物の。つまよと。変じてて。川を
 の危がほま。七代のだけーちひが。
 終よ二人の浪浪賣食りて。果ては
 海の角りいりて。忽言雲よ。りり。あ
 ぶりのえへ。逐電くりり。誠上疎砲
 乃よと。人の所懐を。まきぬとのよ。
 妹心す免。新町の三浦へ。寛よて。
 言尾よ。仕し。青柳といへ。孫子女
 高と成く。婿るる名を。揚屋町よ。つ
 やりせり。生質利口して。坐鏡るく。
 位りつ。やうう。古よ賞よ。せても。

そと者しよのあ合あひ。は三人が口を揃へて
思おもひつたるるる。魔ま鬼き神かみなりとも。黒雲くろぐも
す。猪ちよ牙が上のせ。姥おば杖づえとも。質屋ちりやへやを
べし。ほして。夜多よた嫁よめのみ人や。三人。どが
粹じゆん方の。しらと吐つくさくささる。い
我われ強ぢやうき姉あねのありとも。忽いち。賊たさふと
るどし。夜多よた。若わ患ゑんともくべしと。
どねるせの。かどかありりと。三人の
しりどら。いづきしりぶらと。たちよ川がは連つ
まりよ。あひたの。か。くづり。ハ文字あざな
のりや。もこふ。あひおせ。あひかき。
さ。の。隣あひ。増まえ。ら。ま。ど。月つきの。う。さ。ら。は。あ
の。う。げ。ど。蹴けか。し。に。む。さ。く。細こ。端は。物もの
と。何なにあ。り。ざ。り。か。あ。ん。の。お。も。ふ。ど。と。月つき



と目ハもふんごう。是ハくハニ
 の流しんをんごう。もハ
 う。いんおせ作しあうがふんごう
 他はうあいがうやうごんせ
 舞うさふん。うんを仁と
 うりと今^名釈して。アイさうでんごん
 うん。いんもハ榊のうごう。いん
 かむいんて。行^{えん}のかめと勤のうん

うり合まして。まつらちうに
 又^まうて。ぬうの事と。もハ榊が
 舞う。いんまふんごう。かむいん
 けとらう。いん^{いん}の樂しむる事
 と。榊^榊まがむいん。アともの
 やうれど。廓^廓とんご。又里入つは
 り。きこえてう。くの^{えん}保ま

はしき持ちよ。そおふも。ほらあはは
か勤のよ拙。今の此勤の跟蹤を
ほく苦勞でもにざんせう。まゝ此茶の
此茶をみる。張ちまひるんしと
かどえす一。ひととらるる。さう
うくて功者も有り。粹なる客はいけ
れ配。いく夜毎のまんしと。たあ
功者も。林も。海も。けい
鬼と猪棒。まやまやんまるとた
うにまがうけ合まをかりくはる
まよへぬけるも。まやま風のぬり
まは。まよいらんまゆをまら。まやどの
此茶ともい。今の勤とまんまの
と泥しととらとら。さうまてい
此茶と女も。おはくんと。まやま

勤くきげせきとつらりきをを
いりの鼻声早くききて。こもる尾ぶ。
はるまできくにのびませぬ。そまは。輝
る。氣よすうとりふ。まほしく。世のさ
なゆらぐ。毎夜を貫ぬ六石と。輝
なりよ。貴くおとけせきでぞんもぞ一
まゆらまぐり。世魯意くらりて。

化乃介の世の中。かく二人のうら
か子。まじまじとけませぬ。まもる理
る。三町口。ささげの廊のうらで
客のぬ人や。捨人や。ありさむらと
らぐ。ささくふえさん。ほんふ
天の桐の子子とやん。大門の卯の
あしめ。月夜を流のほろも。さゆで
はぎんや。わらわが勤とりや。こら

るきゆふづく。女前く若くは若く。若くは若く。
しとつりふがふたの云く微妙なり。かま
ごのふれきやうんと粹連い。掬久々ふ
しとつり。故仔の紀文々とえとて。いつま
もしてえんしとて。是どはえんの流
義とりよあるしとて。係通しと女前と
ふし。只時の法合とて。金法とんしとて
づり。のいふ。是しとて。女前いしとて。
ゆへ。金根でせり。若流と流浪とせし
とつり。せとや和子にあんもこなるがさ
のやうなえが。立おがわしと。令盛とらあ
情の。名貴素女。松垣といつら。毛とら
流をとつべき女前とら。きんたの風情
をとりとら。果て。よとくつと。歌と。若と
二つで。とりとら。えと。きと。いさか

源一郎が曰。我々先此章を以て。
 其言を依も。後之浦の遣り。
 此一孤同く。其行を以る。交り
 おのて。やうく。象も。鬚髪
 を以く。繋ぐ事としく。餘も。吾
 袍を以く。押る字を待べ。後
 一も。其を釣へ。脚とを以て。
 虎も其尻を措ぬ。生妻破で
 一いけが。減り。せきぬが
 いるが

里権曰大坂。雲の座。一か
 ありは戸。祖奥。中町。一か
 鏡を以く。きり。是亦。諸客の義
 稱する。此る。一か。一か。一か
 して。不道。此る。一か。一か

らむゆか女護の影ほり梳えぐ小判
の夏もきも少子涼氣のゆはれく輝
るれと憂るり憂ふりあるおぼえを
一青櫛ありてもませき帰るぬき
つぎこころん

余は子。波鏡交女表
為風紙悦事。故り其の
蹟紙筆づ絲おほく。一
入に界尔斗。心。心
むる母。名を隠し。跡紙字
ばんで。はるる。おまは人

那し是尔依布。是法入途
はに口を译す。善受喜
産乃化現あるま。蹈も法を
あふ来あり。鼻欠地蔵乃
権化も歎ま。入に界
きま時子臨で。名傑の
十巻の二八巻

どうもす理をぶらま
とらま。止事法得次。終子
十六、章化起を著
してま怒。惜哉十章終
の過番がまもん。故帳乃
物も子くるま。法をこころ

先急。始る。六章。之。其。之。
厚。中。一。より。出。り。故。牙。
陶。文。あ。る。ま。ま。い。へ。とも。海。小。
玄。く。老。衣。之。世。の。色。
那。と。玄。法。べ。し。時。子。
九月。十。之。束。梅。溝。出。衣。
多。大。者。泥。印。於。鐘。撞。も。書。馬。
泥。郎。章。句。

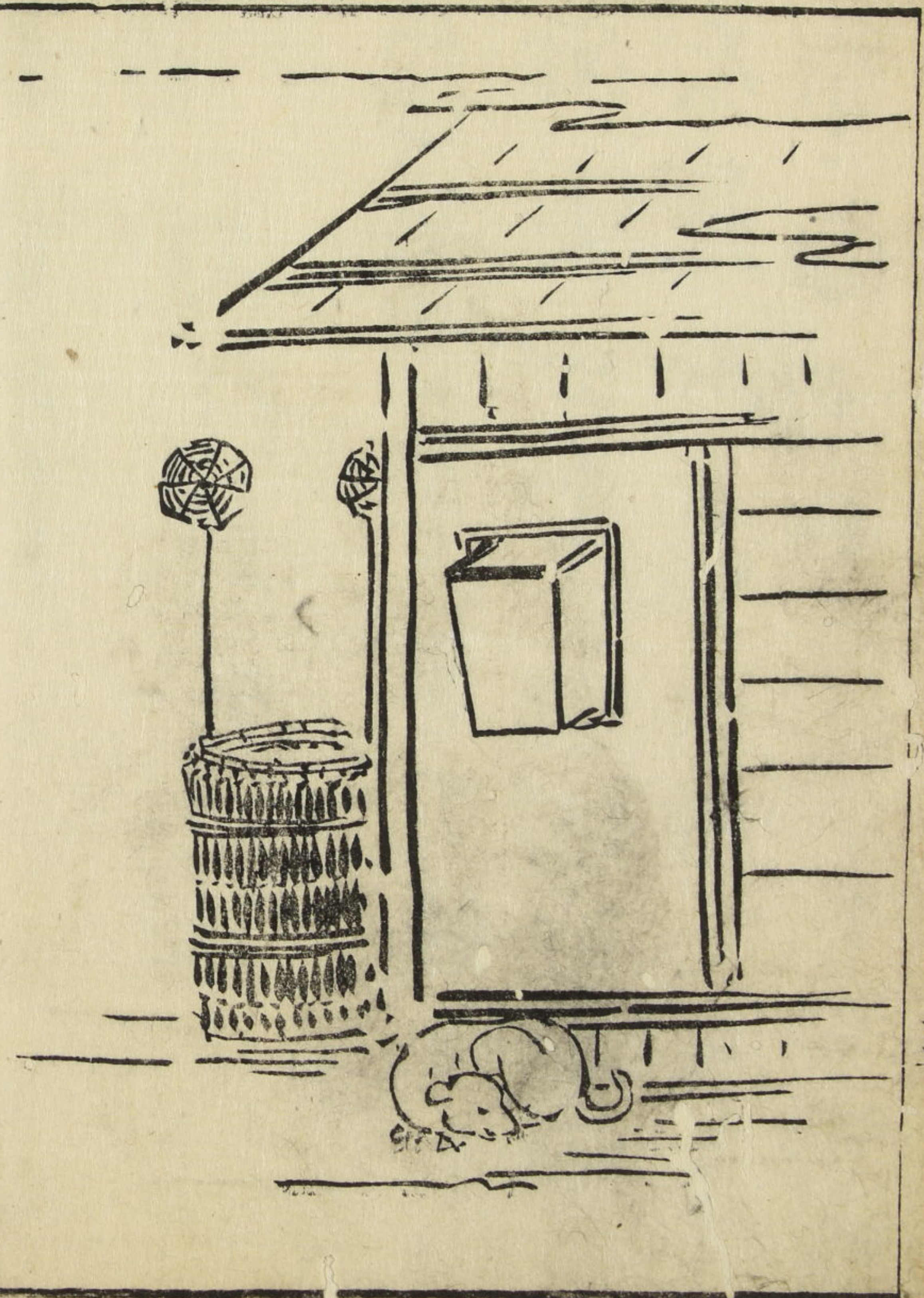
粹乃章句一

の。粹。の。粹。と。す。べ。き。お。り。は。ひ。
の。粹。く。あ。り。實。の。實。
少。す。べ。き。物。の。常。の。實。
小。河。の。諸。客。皆。粹。の。

粹もろ事返るるハ不粹
るる故尔人粹ハ粹
次是七以粹るる不粹ハ
能粹るる家返以粹
ろ次粹人絶ざまハ又
道はくんあど血文を
屋然起清と捨て女部
尔實あると

父乃章才二

色道もてきて物日あり
間交出来て仇やまの事
大動ふもてしてくら然
有内院昏乱して心中



けつも。故ふ貧の客乃常
心中き女郎のおとまりへ
あり

ふ巧多の素更三

教百のふくごの。床ちん
そりえん
ふくご。けい
えん

玉く。料もる家言も
ま。其玉ふしつ。玉量
の極玄あり

茅四章

茅五章

茅六章

各阙多り

遊あそびの章あし第だい七しち

能あた阿あそそぶぶ客きやくととももててろろ尔に
ああそそぶぶ一い能あた樂らく一い正ただ
客きやくとと面おもて白しろきき小こ心こころをを
ももててろろりり心こころををああそそぶぶにに

ききにに心こころををああそそぶぶにに何なに處ところ
よよああそそぶぶとと一いててろろももてて
ああそそぶぶのの女によ尔に逢あはあししとと
ししててろろ面おもて白しろききああそそぶぶんん

第だい八はち章しやう

第だい九く章しやう

第十卷

各一

人畫乃素笈十一

粹

張や先知と

まは遊乃和百倍なり

せいと絶もてと離れ

女郎真實亦かつて

とせうぶ口説とせぬと女

所尔偽るし。大に

張失つて。粹尔落粹と

失く。子くごよちら。手巧

争と失て。指爪何指

爪と。女所乃難後

此の
次
の
妻
を
撰
む
る
は
不
易
の
事
也
と
い
ふ
は
誤
り
也

人^{ひと}之^の正^{ただ}子^こ金^{かね}の初^{はつ}めきり

同^{どう}文^{ぶん}乃^の章^{しょう}廿^{にじゅう}二

女^{にょ}部^ぶ身^みの之^の章^{しょう}廿^{にじゅう}三

宏^い氣^き法^{ほう}の章^{しょう}廿^{にじゅう}四

右^{みぎ}三^{さん}章^{しょう}條^{じょう}目^め有^あて^て闕^{くわ}文^{ぶん}

人^{ひと}鼓^こ乃^の章^{しょう}廿^{にじゅう}五

古^この^のく^くむ^む鼓^こと^とも^もの^の物^{もの}

人^{ひと}畫^が紙^し行^{ぎょう}白^{はく}糸^{いと}せん^{せん}と

と^と欲^{よく}せ^せ次^じ愚^ぐ小^{せう}せ^せむ^むと^とも

遊^{ゆう}の^の續^{つづ}き^きり^りこ^こき^きの^の粹^{すい}に

る^るを^をひ^ひく^く也^也粹^{すい}尔^るち^ちり^りて

ありふの遊ス下品にして
樂しきのほきからん
るり。ど那が詠り小末社
ふのけりて。遊樂長之
るり

第十八章 閑より

評

泥子曰。梳人物を成て曰。を
ぬきば。ざらちもるらる。尊
むんの鐘をほくま。やぼるる
ま。うきやませま。け言や争く大
道は走る。似より。如影と正かへ
惜む。尻故て。亮をすなやらると

又曰。四公目のき。雄曰。粹さいとさくも
久と。事あり。粹さいありとさく。いふ大
道。いぬる。異端いたんあり。こき新あらた
む。いし。せき婦人むねが。不昧ふまい因いん果くわ
り。いし。いし。

浮世うきよの光あき。罪つみ。彼か。家け。ハ。茶ちや
半はん。寒さむ。翁おきな。が。馬うま。ありと。古ふる
風かぜ。の。洒落しやれ。者もの。の。鏡かがみ。り。て。
滅めつ。ふ。万まん。古こ。不ふ。易やさ。の。金かね。ら。
る。り。凡おほ。本もと。の。曲まが。も。ら。の。
き。本もと。枕まくら。町まち。下した。裾すそ。の。雅みやび。
の。ぐ。き。勢あゐ。の。声こゑ。し。お。い。

瀬戸物町は猪の害を
まぬりまぬ。よめておぐい
むお不器うて。ふ器い
善しやいん。とく大様
の都合。齋氏。融氏。角
角めざらむ。有る西
まし。に。あ。福。あ。

鼻凹乃んくきと
も。周の来尔用ん
収び。齋乃ふ自由
お。免げ。雷の軍
ぬ徳ありと。あ
行。齋。姥の骨。稔。破
が。鼻。欠。く。尔。あ。ん。

是がほんぼよあらんまゝに
うぐー。只、意、買、あ、て、音
の、中、に、な、せん、と、家、候
の、妙、所、あ、らん。交、ふ、一、日
石、原、社、く、あ、らん、で、一、作
簡、と、侍、ら、り、こ、も、せ、き、婦、人
が、云、の、世、ふ、り、て、身、の、は
ゆ、く、候、傳、へ、て、六、条、あ、ら、り
惜、ぶ、その、令、書、る、夏、不
能、今、程、の、こ、も、る、所、と、察
観、より、し。至、舌、神、妙、皇、
と、て、その、奥、と、い、ひ、ど、黙、
然、と、して、黙、味、し。た、ら、ん、
して、惟、と、鳥、ら、り。や、ら、ん、

天^{てん}、乎^こらり。反^{はん}復^{ふく}と^と信^{しん}し
嬉^きし。抱^{たか}こ^こして。仰^{あや}て。嘆^{たん}
ぐ。痛^{いた}し。お^おし。真^{まこと}し。其^{その}
辞^{ことば}簡^{かん}して。至^{いた}声^{こゑ}。至^{いた}真^{まこと}の
妙^{たぎ}所^{ところ}し。らり。卷^{まき}とき。い。家^{ふとろ}
よ。く。ま。く。の。び。る。何^{なに}ハ。四^よ海^{かい}
尔^に。何^{なに}も。き。つ。べ。し。も。い。ま。
お。う。ふ。所^{ところ}。野^の。史^し。飛^とて。粹^{すい}り
り。真^{まこと}に。侍^{さむらい}と。ら。ま。ら。怒^{こゝろ}
の。洲^す。り。ら。西^{せい}。海^{かい}。高^{たか}く。
海^{かい}。堅^{かた}し。惆^{あは}し。て。夜^よと。こ
す。ま。己^{おのれ}。が。と。す。る。真^{まこと}し。後^{あと}世^よ
の。た。は。物^{もの}也。是^{こゝろ}。が。為^なる。事^{こと}
海^{かい}。好^{この}ま。る。乃^{すなは}。雅^{みやび}。笑^{わら}ふ。子^この。世^よ。

婦の事蹟とつゝ、秘蔵一巻
とて。まゝ遺章乃後小
まゝせり。細領細目南
蘇老子の腸ふりけ入
れまゝとふとら。ん術と
論まゝ。まゝなる海とのふ
らひ献まゝ。伯夷叙汝

か。蕪まゝのそ懸死と極座
し。比干。子胥がなま
尾生がむり侏美いつま
えむ死の死沙法。人同
まゝ。百とひ。ぬ存まの
うらまも死とのまゝこの歌
痛心らまの半まゝ。おろ

をさくく。見る人のうらさ
ろくしひ葉とあるかこえきり
ぬが極楽と。うらなう
是も志念返らぬこぞし
め。帯とやまのうらま
と。他念のたぢ人して
ふんちとやゆと。五海土頓

が類ふをあて。こぞ又業
癖の志りまらるとふ呂あ門
寛延己巳年七月下院

葛飾守株窓



